

「大蔵会」の伝統を憶う

木村宣彰(教授・仏教学)

■第87回大蔵会の開催

永い伝統を有する大蔵会は「法会」と「学術講演」と「展観」を併せ行うのを慣わしとしている。平成14年11月16日に本学講堂で開催された第87回大蔵会もまた慣例に従い、初めに真宗の法式に則って法会が執り行われた。小川一乗学長が勤行の導師を勤め、読経中に主催の「京都仏教各宗学校連合会」の各加盟校代表が順次に焼香した。講堂棟の多目的ホールを会場として催された展観は「一切経の諸相 -日本-」のテーマに沿って重要文化財を含む60点の版経や古写経などが出陳された。本学図書館が所蔵する貴重資料によって日本における一切経(大蔵経)の歴史的展開が端的に分かるように配慮された素晴らしい展観であった。列品の一つの内容については当番校(大谷大学・京都光華女子大学・大谷専修学院)が編集した「展観目録」に行き届いた解説がなされている。遠近各地から訪れた多くの参観者は「展観目録」の解説を手引きとして熱心に出陳品に見入っていた。殊に若い学生が大蔵経に関心を寄せている姿が多く認められたのは、誠に悦ばしいことであった。

この展観と相呼応する形で大蔵経研究の世界の権威として令名の高い笠沙雅章先生が「中国より見た日本の一切経」と題して講演し、日本における一切経の書写や刊行に中国で印行された各種大蔵経が影響を与えていることを、最新の研究成果を踏まえながらも分かりやすく話していただいた。誠に以て大蔵会に相応しい蘊蓄を傾けた講演であり、聴衆

に多大の感銘を与えた。

今回の大蔵会はこのように滞りなく営まれた。この機会に改めて大蔵会の伝統について考えることも無意味ではないであろう。大蔵会はいかなる経緯で開催されるようになったのか。八十有余回も重ねてきたのは何故か。そもそも大蔵会を営むことの意義は何か。

■大蔵会の意義

仏教は仏・法・僧の三宝である。仏教には必ず教主である仏と、その教えである法と、それを信受する人々すなわち僧(僧伽)が存在する。その一つを欠いても仏教は成り立たない。それ故に仏教徒は三宝に帰依し、仏宝・法宝・僧宝の供養を疎かにはできないのである。現に仏宝供養として春四月には降誕会を、十二月には成道会を、そして二月には涅槃会を行っている。僧宝供養はもっとも盛んであり、各宗各派の開山や祖師の御遠忌や報恩講などの法会をはじめとして各種法要が屢々勤修されている。それらに比べて法宝供養は全く閑却されている。仏教にとって無くてはならない法宝が等閑されてよいはずはない。混沌の世にあって仏陀の教説こそは人類の最も確かな指針であり、畢竟の帰依処である。その法宝である仏教経典をインドから将来し、流布に努めた多くの人々の苦勞により、後の世に生きる我々が仏陀の説法を聴聞することができるのである。それにも拘わらず為法不為身の精神をもって法宝の流布・久住に功德のあった三蔵法師や諸賢を鑽仰する法会がないのは仏教徒として誠に遺憾なことではない

だろうか。このような反省から始まったのが大蔵会という法会である。

■大蔵会の歴史

かつて日本には「一切経会」という恒例の法会があった。『初例抄』巻下に「延久元年(1069)五月二十八日、宇治一切経会を始む。永く恒例の会となす」と記している。『濫觴抄』巻下には「久安四年(1148)三月十五日、祇園一切経会を始む。上皇の御願なり」と伝えている。これらによると既に11世紀中頃から諸寺等で一切経会が行われていた。この一切経会がある時期から途絶えるが、やがて有志が協議し「大蔵会」の名のもとに復興する。それは往時の一切経会の趣旨を受け継ごうとしたものであった。明治から大正にかけて仏教学界の重鎮として主に東京で活躍した常盤大定・荻原雲来・荻野仲三郎・渡辺海旭・高島米峰・高楠順次郎・中川忠順・藤岡勝二・境野黄洋・島地大等が協議して「大蔵会清規」を定めた。そこに「本会を大蔵会と名づけ、大蔵経の翻訳、将来、攻究、雕造等に関して功勞ありし人々の遺徳を鑽仰し、その精神の普及を図る」と大蔵会の名称とともに目的を謳っている。

こうして大正3年(1914)11月3日、東京上野の美術学校において最初の大蔵会が開催される。その「招待状」には「此の展覽は当日御出席諸君の御出品を請うて成立せしめ度希望に御座候間何卒奇籙珍本等、苟も漢訳蔵経及び其の将来、雕造等に関係あるものは成るべく多数御持参の程奉願上候」とある。当日の大蔵会に出陳された貴重な古写経などはすべて参会者自身が各自持参したものであった。翌日の『東京朝日新聞』には「豊山大学長権田雷斧僧正、恭しく祭壇に進みて式文を朗読し、東洋大学教授島地大等氏の『創立の趣旨』に次いで、帝大講師常盤大定文学士は『大蔵経について』と題し、(略)十七種の板本蔵経に就いて、簡明に、頗る秩序立ちたる

講説を試み、最後に村上專精博士は『日本蔵経に関する四天王』の題下に、黄檗の鉄眼和尚、獅子谷の忍激、越前の丹山両上人、及び明治時代に於ける故島田蕃根翁の蔵経翻刻に就いての偉業と功徳を称賛した」と報じられたという。更に「当日、日蓮大学・豊山大学・東洋大学・曹洞宗大学が、特に休業して学生が多くこの会に参加した」と伝えている。仏教関係者の大蔵会に対する期待と意気込みを知ることができる。

こうして大蔵経の翻訳、将来、攻究、雕造などに功勞のあった三蔵法師や諸大徳の遺徳を鑽仰し、併せて大蔵経の普及を図ることを願って大蔵会が始まった。

■京都・大蔵会

東京で最初の大蔵会が開催された翌年に京都でも大蔵会が企画される。東京の大蔵会が有志の発議によって営まれたのに対し、京都・大蔵会の主催は「京都仏教各宗学校連合会」という組織であった。京都には各宗各派の本山が多数あり、それぞれが僧侶養成の教育機関として大学や専門学校を経営していた。それら各宗各派が設立する学校のうち10校が集まり、有機的な交流をはかるために明治39年(1906)12月に「京都仏教各宗学校連合会」を結成した。この「学校連合会」が主催者となり、法宝尊重の美風を堅持し「令法久住」を願って大蔵会を開催した。時あたかも大正4年(1915)11月10日には京都御所紫宸殿において大正天皇の即位御大礼が挙行された。この即位礼を記念するための行事でもあった。かくして大正4年11月21日22日の両日、真宗大谷大学の校舎・図書館を会場として第1回の大蔵会が開催された。爾來、今日に至るまで大蔵会は菊薫る秋十一月に開催することとなった。春の降誕会すなわち「花祭り」に対して仏教徒が秋季に行う「新しい年中行事」として定着させることを目論んだものでもあった。

京都・大蔵会は前年に東京で開催された大蔵会が切っ掛けになって始まった。しかし東京の大蔵会に先だって京都でも盛大な仏教典籍の展覧が行われていた。それは東京巢鴨から京都に移転した真宗大谷大学の真新しい校舎で大正2年(1913)の11月9日10日に開催された「真宗大谷大学附属図書館古書展覧会」(尋源会主催)である。この展覧は質量において空前の規模を誇るものであった。恐らくこの「展覧会」の好評が京都で大蔵会を開催する機縁となったのであろう。

■第1回の大蔵会

このように機が熟して大正4年11月に真宗大谷大学で催された第1回の京都・大蔵会は、次のような次第で執り行われた。先ず「法会」で法隆寺貫主の佐伯定胤が表白文を朗読し、真宗大谷大学長の南條文雄が勤行の導師を勤めた。次に「學術講演」では実に7名もの錚々たる講師が両日にわたって講演を担当した。第1日目は、羽溪了諦(「本会の記念章に就いて」)・妻木直良(「中国及高麗刻経沿革」)・内藤虎次郎(「房山石刻版経に就いて」)・佐賀東周(「大蔵会陳列会管見」)が、第2日目には渡辺海旭(「東京大蔵会を代表して」)・南條文雄(「亡友楊仁山居士を追憶す」)・藺田宗恵(「大蔵会の護持」)がそれぞれ講演を行った。翌12月に発行の『仏書研究』『学壇消息』によれば、「展覧」の会場には新築間もない赤レンガの本館階上の十二室が充てられていた。①宸筆その他、②大蔵経版式標本、③単行版経、④写経、⑤経板経帙等、⑥拓本、⑦肖像墨蹟、⑧梵暹藏滿諸大蔵経などの諸部門に分類された陳列品は実に四百有余点にも及んだ。その目録は昭和56年(1981)に京都・文華堂書店が複製した『大蔵会展覧目録』に記載されており、豪華な出陳品の委細を知ることができる。

■大蔵会の将来

先般の第87回の大蔵会は、初回以来の伝統を護って懇ろに執り行われた。今に至るも確実に伝統は生き続けている。大正4年に始まる大蔵会は、永い歴史のなかで紆余曲折はあったが、戦争の世紀といわれる激動の20世紀にも関係者の「令法久住」の願いと並々ならぬ努力とにより、連綿と継続されて今日に至っている。あと十数年後に第100回の記念すべき大蔵会が開催されることであろう。この大蔵会の将来はいかにあるべきか。

最初の大蔵会を無事に終えて有志の者が大蔵会の将来について語り合った。「常盤(大定)君は、その宿志たる、大蔵経和訳論を唱える、僕は、それよりも完全な『仏教聖典』編纂の急務を唱える。要するに大蔵会の将来には希望が洋々としている」と高島米峰は記している。東京・大蔵会は昭和19年(1944)の第30回を最後に中断したが、常盤大定の思いは『国訳一切経』等の各種の国訳や現代語仏典の刊行によって達成されつつある。高島米峰の願いはやがて漢訳大蔵経の決定版ともいうべき『大正新脩大蔵経』の編纂によって結実する。渡辺海旭もまた大蔵会について所感を述べている。曰く「一宗の隆盛は、必ず重厚真摯の学風を興し、篤学者を尊重するに基すべきを以てせり。大蔵会成る。即亦此苦言を反復するの機会に会せり」と。渡辺海旭は彼の属する宗派にこと寄せて述べているが、これは取りも直さず大蔵会の存在意義を示したものである。まさしく大蔵会は、仏教徒にとって古賢への感謝と自らの反省、そして仏教界の将来を語り合う絶好の機会なのである。今回の大蔵会を終えて、さて、いかなる反省がなされ、どのような希望が語られたのであろうか。志なくしては何事も達成できない。混迷の時代にこそ「令法久住」の大蔵会の意義がいよいよ増大することだけは確かである。